

私一人になってしまいました。

## 鯨兵団の一員として

桂林・南部粵漢戦

愛媛県 高橋 進

大正十二年十二月一日、愛媛県の農家の次男として生まれ、姉妹なしの男ばかりの兄弟七人の家庭であった。長兄は昭和十五年十二月一日、現役兵として高知の歩兵連隊へ入営、中支の第四十師団歩兵第二三六連隊（鯨第六八八四部隊）へ出征中であつた。その後私は大阪の被服廠へ徴用となつたが、勤務は予想外に厳しく、点呼で対抗ピンタを取られることもあつたので、進んで兵役の志願をした。

昭和十七年十二月一日、歩兵第二三四連隊要員として歩兵第一一二連隊補充隊第二中隊へ入営。十二月十七日、転属のため丸亀を出発。以後下関、新義州で朝鮮へ入り、山海関を通過し、北支那より南下し中支へ

と輸送された。

その輸送中の出来事であるが、浦口より南京へと揚子江を渡り、兵站宿舎で二日間を過ごした。同年兵戦友と三人で景色の良い所へ行ったら、歩哨に捕まり衛兵所へ連行され、衛兵司令より気合を入れられて、顔は腫れ上がり、口の中は切れて出血。ほうほうの態で宿舎へ帰り上官（兵長）に報告。兵長殿は「よし！その衛兵所へ俺を連れて行け」と新兵三人を同行して衛兵所で「前線の第一線要員として輸送中の大事な兵を、些細なことで傷つけるとはどういうことか。南京あたりの後方で案に警備しているお前等とは大違いの大事な兵だ。何故殴つたか？理由次第では承知せん。上級の隊長と談判する。返事は？」と恐ろしい剣幕で抗議した。同じ兵長の衛兵司令も最後には陳謝して事はすんだ。私等三人は「頼りになる兵長殿！」と信頼を高めた。

その後武昌を経て、昭和十八年一月七日湖北省汀橋着、第一中隊に編入。三月三十一日汀泗橋出発、四月十一日湖南省華容に着く、その駐屯中、一週間に一回

の割合で付近の敵状偵察をしていた。ある日七人で偵察に出た。稲刈りの終わった田圃の小道を通る途中、小さい水路を次々に跳んで通過。私は先頭より五番目で何なく通過。ところが七人目の最後尾の兵が跳び渡った個所に地雷があり物凄い爆発で体が二つに切れ、足のついた下半身は五〇メートル程飛ばされて即死。七人すべて同じように行動し何等特別な違いもないのに、人の運とは分からない。ただ一人だけ地雷に遭うとは。彼は同じ分隊員であったので屍衛兵を命ぜられた。死体を焼こうとしたがなかなか焼けない。気分の悪い思い出であった。

以後、部隊は江南殲滅作戦、十一月よりは常德作戦であるが、我が第四十師団は第三師団（幸兵団）、第一六師団（嵐兵団）と共に攻撃した。常德は沅江という大河に面した湖南省洞庭湖岸第一の都市で、沙市と共に農産物の集散地で、重慶の南玄関として重要な補給地であり、敵は近代装備をした精鋭軍団であった。この作戦では同じ西条出身の加藤さんが敵の砲弾で腹に大穴を開けられ戦死された。よく「元気で頑張

れよ！」と親切に声を掛けてくれた先輩であったのに、戦争ではいかんともいたし方ない悲しみであった。

戦争は地上軍ばかりの戦闘ではなかった。当時、中国各地には在支米軍基地が散在し、多数の、しかも最新鋭の米軍機が我が軍との戦闘に参加し、空爆、銃撃による損害はますます増大していた。戦闘機はカーチスホークP51、双胴のロッキードP38などである。

華陽より常德の方向へ南西に行くとも南東がある。常德方面に敵の一個師団が来たとの情報あり。部隊は行軍中昼食をとる。上半身裸となり何の警戒もなくのんびりとしていた。双胴の見馴れぬ飛行機が一機来た。「日本にも双胴の珍しい飛行機が出来たもんじゃ」と敵とは気付かず手を振ったりした。約三十分したらP38が六機程来襲して水平爆撃だ。我々は飛行機の爆撃とは急降下してくると思っていた。敵は高空を水平に飛びながら投下する。爆弾が上空より落下する際は、キューッという音で機体の飛ぶ時の音とは全然違う。のんびりした気分が一変して地形地物を利して回避す

る。無惨にも死亡六人、負傷四十人の大損害。これより上空への警戒、行軍時の監視が厳しくなり日本軍は苦しめられた。

湖南省、特に洞庭湖付近には湖沼や河川が多い。従って我々歩兵の作戦には工兵、特に上陸、渡河の舟艇工兵の協力が不可欠である。私は、工兵隊の責任感の強さを感じた。

洞庭湖西側の赤山島上陸攻撃の時である。工兵が操縦する上陸用舟艇に我々歩兵が乗り、体を伏せて敵の銃弾をさける。舵をとる工兵は頭も下げず、ぐっと上陸地点を睨んで雨霰と飛んでくる敵弾に身を晒して任務を果たそうとしている。その尊い姿には歩兵は唯々頭を下げて感謝あるのみ。この上陸作戦では私の部隊関係のみで四人の工兵が舵を握ったまま戦死されたと聞いた。責任感の強かった工兵の方々の御冥福を祈るのみであった。

我々の師団、鯨兵団は勇猛の名を欲しのままにした兵団である。従って、中支第十一軍という戦闘専門の

軍の中でも有数な強力兵団であるが故か、大きな戦闘に参加をしたし、我々兵員も部隊の名を汚すまいとして、困難な任務を遂行してきた。そのため、上官や先輩ばかりでなく、特に我々兵隊に大きい負担、犠牲者も多かったのである。

私の従軍中最も辛い思い出が二つある。第一は桂林作戦で私の第一中隊は決死隊となり、私も参加した。あやうく靖国神社行きをまぬがれて、九死に一生を得た。第二は南部粵漢打通作戦に私の第一中隊は甲挺進隊となり（甲挺進隊は作戦を成功させ、軍司令官感状を授与された）私も参加した。

昭和十九年——この年こそ、中隊においてもまた、我々の人生にとっても大変な年になるうとは、その時点では考えも及ばなかった。

桂林攻略は、大陸打通作戦の中でも大きな意義をもった戦闘であった。桂林は在支米軍航空基地として最も重要なものであった。現在では、中国観光名所として有名で、桂林の風光は天下無比であり、石筍のよう

な岩山、南面にある山容で知られ、その姿が桂江（凜江）の清流に影を写している。その桂林へと軍は猛進していた。

我が中隊の兵員は、華陽を進発した時は二〇〇人近かった。湘桂作戦第一期、第二期を経て、この桂林を攻撃する時は大半の兵員を失っていた。長い戦旅である。将校も兵も軍衣はボロボロである。私たち若手兵はよく戦友の死体処理、埋葬を命ぜられた。私も三人近く埋めた。中国の苦力に大きな穴を掘らせ、一人一枕を束（日本、故郷）の方にした。

南支の夏は炎熱の太陽で大地も焼けるように暑い。二日前の死体はもう蛆虫の巣である。濁った赤紫色の斑点が、土色の肌いっぱいに出て強い屍臭を漂わせる。戦場で見られる最もむごいこの死体を見ても、兵隊は無感動、無感覚になっている。戦死には予告も順序もない。数分後自分が死ぬかも判らないのである。その時、死体に向かって合掌し「この仇は必ずとつたる！ 迷わず靖国神社へ行ってくれ」と繰り返して誓って、また前進する。埋める前に左小指を切り落とす

飯盒へ入れて携行し、炊事の時に小指を焼いて骨にした。行軍して脚を動かすと、飯盒の中の小指の骨が音をたてて語りかけてくる気持ちになった。

時に昭和十九年十一月四日午後十一時三十分、湘桂作戦最大激戦の桂林城攻撃の最難関といわれた七星巖夜襲が開始された。

大隊は去る十月三十日から五日間、七星巖を目前にして攻撃方法戦術を研究してきた。私の所属する歩兵第二三四連隊第一大隊第一中隊は決死隊となり、冷たい小雨の降る中、芋畑を匍匐前進した。敵前五〇メートルには戦車壕が掘ってある（幅四メートル深さ二メートル、太い竹槍がビッシリと植え込まれ、壕へ落ちたら必ずただではすまぬ。大怪我をするようにしてあった）。その付近は無数の地雷があった。決死隊となった第一中隊（柴田中隊長）に、師団工兵隊第二小隊が火焰放射器二台を装備して配属された中隊の指揮下にいた。

第一中隊はこの夜襲に先立ち、四日の午前中工兵隊は器材の準備に忙しかつた。地雷表示材料、戦車壕用

梯子、鉄条鉄、鉄条網破壊筒、兵舎爆破用爆薬、トーチカ用各種爆薬、火焰放射器等、各肉迫班毎に整備点検。その動作はきびきびと心地良い。

準備完了。

歩兵突撃隊古川（曹長）小隊三十人を先頭に、工兵肉迫攻撃隊真砂（少尉）小隊三十人、柴田中隊長と指揮班、第二小隊、第三小隊の順に整列。大隊長鈴木大尉の訓辞と激励の言葉のあと、心尽くしの勝栗かきりが配られ、恩賜の煙草が一本ずつ全員に渡され、最後の一眼である。これが最後であるかもしれない。

右第一線の我が中隊が戦車壕の手前に達した時、左第一線の第二三五連隊第二大隊が交戦を始めたため、敵の七星巖陣地も一斉に防戦を開始。至近距離の銃弾、迫撃砲弾が集中して隠密の肉迫はもうこれまで。いよいよ強行突撃だ。突進合図の信号弾を打ち上げ「擲弾筒前へ！」と柴田中隊長が命令した途端に、敵の迫撃砲が一発右直前に落下炸裂した。無念！柴田中隊長は首と胴が分かれての戦死！代わって小隊長古川曹長が指揮をとる。

暗闇の鉄条網に深紅の火焰を吹き付けた。敵はこの火焰放射器の猛火を見てか、一瞬射撃はひるみ、第一中隊の決死隊は工兵の支援のもと突撃に移る。私はその時第一中隊第三小隊第三分隊で擲弾筒の射手として参加していた。戦車壕の手前付近は、至る所地雷が埋設されている。地雷にかかった数多くの戦友の屍は、爆風にとばされ暗夜に飛散する。草むす屍となつてしまったか！

小原兵長ら工兵三人は、突撃隊の前方五〇メートルを匍匐前進して地雷数個を処理、危険区域を白布で標示した。これで最も心配した地雷原を通過して戦車壕の線にたどりつく。

歩兵も工兵も雨にぬれ、泥にまみれて黙々と匍匐して続く。工兵の用意した戦車壕用梯子は四メートル幅の壕にかけられ、この上を一人ずつ這って渡る。途中で中間が下へ曲がる。直ちに工兵が壕の前後の土を崩して通りやすくする。壕の底は一面に太い竹槍が上を向いて埋められ、落下すると竹槍に突き刺さるように工夫してある。先頭の工兵三人はすでに低鉄条網の線

に到達したが、続いてまた幅四メートルの低鉄条網、また頑丈な屋根型、そしてまた幅二メートルの屋根型と続く。工兵第一肉攻班山口分隊はこの作業を続行。歩兵突撃隊はこの突撃路の開くのを待って、左右に開いて警戒態勢にあり、その他の工兵隊員は戦車壕の前で待機中。

柴田歩兵第一中隊長の壮烈な戦死を目前にした真砂工兵小隊長は、責任の重大さを感じ、何としてもこの危機を乗り越えんと心は焦っていた。敵の照明弾が打ち上げられ、陣前は青白く光っている。

山口金満伍長が低鉄条網に破壊筒を挿入して点火し「後へ！」と怒鳴る間もなく「ドカーン」と地軸を揺るがす爆発音は土砂と共に煙となり突撃路はぼっかり口を開けた。だが、残念にも山口伍長の勇姿は消えていた。爆弾三勇士の桂林版となる。彼の勲功を称えその御冥福を決死隊一同で祈る。合掌。

古川突撃隊長に続く歩工の一団がここを通り抜けて敵のトーチカ前に進出。山口伍長戦死に続いて古川小隊長もまた右頸から肩を貫く銃弾に斃れ、赤々と照ら

し出された突撃路付近は修羅場と化し、歩工は次々と斃れた。

敵はこの機に乗じ逆襲を企図してか、急に十数メートル前方の交通壕がざわめいた。時に零時頃であったか。真砂少尉はとっさに「突撃は今だ！」と決心して「火焰前へ！」と叫んで躍り出た。火焰手これに続き、逆襲する敵に紅蓮の焰を浴びせた。敵は一瞬無抵抗となり砲撃も銃弾も消えて、我が軍の火焰と突撃に完全に吞まれてしまった。

一五〇メートルも前進したところ、再び鉄条網があり、側防火器も思い出したように横から掃射を加えてきて、また何人が斃れた。ここで友軍の突撃は一頓挫したが、再び破壊筒を前方に推進して兵舎目指して突進した。

第三肉攻班と予備班は続いて兵舎前まで進出したが、側防火器の待ち伏せ射撃に遭って次々斃れた。材木の切れ端や瓦が頭上から降ってきて、また兵舎は吹っ飛び火煙は次々と隣接の兵舎へと燃え移り、弾薬庫もあるのか激しい破裂音は耳をつんざき、兵舎を焦が

す炎は真昼のように照らした。

そこには突撃に整れた彼我の戦士が血に染まっつうごめき、凄惨さは筆舌に尽くし得ない。

かくして鈴木大隊（第二三四連隊第一大隊）は七早巖上を十一月七日朝には攻略、次いでB洞窟入口を封鎖して攻撃続行、七日夕刻七星巖高地を完全に奮取した。

私は陣前の戦車壕を越えるため工兵隊の梯子を通過中、敵の擲弾銃から撃たれた例の柄のついた手榴弾が不発弾で右肩を直撃した。右手に擲弾筒を持っていたが、その衝撃で身も筒も一緒に壕の中へ転落した。幸い竹槍のない所へ落ちたのでその方の怪我はないが、右肩が脱臼して動かない。竹槍のない壕の中へ他の負傷者と共に収容され、小雨の降る中を天幕をかぶって痛さに耐えていた。連よく不発弾と竹槍のない所に恵まれて九死に一生を得た。

衛生兵が一人付き添っていた。夜明け頃衛生兵が「東の方から土民がそろそろ来よる」と言う。抵抗力のない負傷者グループのこと。それでも精いっぱい

反撃をと覚悟して「ああ、もうこれで最後だ。桂林の土だ」と思い定めたが、土民でなく大隊本部が苦力を連れて患者収容に来てくれたので、ヤレヤレまた命を儲けたわいと戦友と言んだ。担架もないので身に綱をつけ、芋畑をひきずるようにされて大隊本部へ収容されて人心地がついたと思ひ出す。

夜明け前に大隊本部の伝令が「第一中隊全滅」の報をもたらしした。中隊長以下歩工の多大の損害を出し、陣地を奪取したとは言え、中隊の残存兵力は僅か一桁の人員となった。攻撃開始前の中隊は九十八人もいたのに。第一中隊は中隊としての勢力もないので大隊本部直轄となり、後日他の大隊や中隊より将校、下士官、兵を沢山補充されて新編第一中隊となった。

第二代の柴田中隊長を喪った第一中隊は、後任に新しい中隊長として陸軍中尉倉林英夫を迎えた。この中隊長は、終戦の最後まで中隊とその運命を共にした中隊長である。

失われた数多くの戦友の悲しみにも耐えながら迎えた倉林中隊長は、故第二代柴田中隊長にも劣らぬ若冠

二十一歳の幼年学校を首席で卒業した背の高い無口な青年将校であった。

第四十師団の最右翼の我が歩兵第二三四連隊、しかもその最右翼の第一大隊第一中隊の中隊長である。

中隊の兵士たちは、この中隊長を中心として、伝統ある中隊の精神に則り、桂林を屠り、柳州への軍公路を西へ西へと急いだ。その柳州へ向かう中隊の兵たちの首に垂れ下がった遺骨箱の中には、数々の激闘苦戦に散った戦友の骨が、行軍の足並みに合わせて、カタコトとかすかな音を立てていた。

南部粵漢線打通作戦について。この作戦は、まさに忍者の作戦であった。

支那のおわん型の帽子や百姓の編笠をかぶった男たちが、みんな同じ様に黒か濃紺色の垢汚れた貧しい農民の衣服をまとっている。野盗か、それとも山賊の一群か。黒装束の縦隊、まるで隠密の忍者行進だ。

闇夜の中でよく見ると、百姓姿の木綿着の襟もとから赤い襟章に小さな黄色の星型、短いズボンの裾下に

は締め付けられた巻脚絆。それは、紛れもない日本陸軍の軍装だった。軍靴の底には、ひとまわり大きい草鞋をはきかぶせ、ポロ布で巻き込んだ小銃は横かつき、その両端に装具をくくりつけて天びん棒の荷物のように見せかけ、重機関銃の銃身や部品も各個に分解し布包みに背負っている。

ここ支那大陸の西南方の奥地。正確な地図面で見れば、江西、湖南の二省の南端と華南地域の広東、広西両省の北東部が複雑に交差して省境を界するけわしい山岳地帯、俗に老山界と呼ばれる僻遠の地である。

遠くヒマラヤ山系から雲南・貴州の両省を越え、うねりくる尾根は、大庾嶺、越城嶺、都廳嶺、驢子嶺、騎田嶺に分かれ、それぞれ標高一五〇〇メートル級の山系が波立ち五嶺山脈と呼ばれ、その五嶺のうちの大庾嶺。すぐ目の前には老山という垂直の鋭い岩山が望め、山頂付近には少数民族の苗族が集落をつくり住んでいるという。

昭和二十年一月三日。時刻は間もなく四日の零時を迎えようとしていた。支那大陸も南方の冬季はしのご



やすいというが、深夜の冷気はさすが身にしみる。小石まじりの間道を一群が通り過ぎると、また別の黒装束の一隊が続く。軍勢およそ四五〇人余。

行軍中の個人の私語会話を禁じられた無言の暗夜行進。隊列の先頭は保田軍曹と藤田伍長の指揮する情報分隊と台湾出身の通訳、それに戦場慣れして多少の支那語が話せる古参兵らが歩き、「走ツキ！（進め）」「休レ止ム（止まれ）」行軍中も支那軍隊の号令で行動する。

隊列の中央に入る本部が整列した。大隊副官の菅泰敏中尉は、手にした通信用紙を細かくちぎって足元に投げ捨てた。紙片は一瞬のうちに見失うほど漆黒の暗闇だ。農夫姿の本部勤務の下士官、兵も無言のうちに集合すると、指揮官の鈴木竹夫少佐が足早に歩き出す。鈴木少佐だけは通常の日本陸軍の将校軍装である。最後尾で第一中隊が行進に加わる。黒装束、その名も隠密、甲挺進隊は、暗黒の山陰に消えていった。この甲挺進隊は、我が歩兵第二三四連隊第一大隊である。

日本陸軍の「兵用地誌」という正確な地図にもないこの秘境、けわしい五嶺の山岳地帯に潜行した甲挺進隊は、二〇万分の一の簡単な略図を唯一の参考資料として、夜空の星と将校の所持した時計バンドの磁石だけを指針に、ひたすら東方へ向かって行進する。攻撃目標地点まで直線で一六〇キロ。

この夜半、行動開始してからは後方の師団司令部との通信連絡は一切封止された一方通行で、昼間は人里離れた谷間や森の奥に隠れ、なるべく夜間だけ急行進する。もし潜行の道中で敵と遭遇したときは、逃走するか回避して交戦はしない。装備も重機関銃二基だけで、大隊砲など火器は編成から除き、兵らは小銃弾六〇発、手榴弾二発だけを支給された。身軽だが徒手空拳。隠密行動をとるための束縛と行動制約に、驚くべきことに衛生救護班の配属もない。

出発の前に我々兵たちは「寝ると思うな、食べると思うな、道を歩くと思うな」という三カ条を徹底して訓練されたほか、隠密行動中にもし負傷したり、また歩行不能で落伍したときは、一発の手榴弾で自決する

ようにと非情な勧告さえ受けていた。兵たちは、今度こそは必ず死ぬと思っていた。

軍隊の命令は苛酷、非情なことは戦場にあつて当然のことだが、果たしてこのような作戦行動が成功するであろうか。一般兵法の戦術では、この挺進戦闘は機動力に優れた騎兵の戦法であり、歩く人間、歩兵が馬の役目を代行して、馬力の代わりに人間の限界を超える任務を遂行しようとした。

#### 「第四十師団作戦命令」

甲挺進隊は一月三日の夜、道県付近を出発し、おむね省境地帯を突破し白石渡―坪石鎮付近の鉄道術工物を無傷占領すべし。攻撃時期は一月十九日零時を予定す」

これが甲挺進隊が受けた作戦命令である。

挺進作戦には数多（五個師団）の精銳を尻目に、我が第四十師団（鯨兵団）が起用された理由は「刻苦欠乏に耐え、かつ戦闘経験の豊かな勇猛兵団」との理由であった。

とくに本作戦の本命ともいえる新岩下鉄橋を無傷確

保する甲挺進隊長の任務を最優先に人選されたが、鯨・第四十師団長宮川清三中将は「鈴木少佐にやらせよう」と特定指名した。

以下その各挺進隊は

甲挺進隊（歩兵第二三四連隊第一大隊鈴木竹夫少佐）  
乙挺進隊（歩兵第二三六連隊第一大隊香月則正少佐）  
丙挺進隊（歩兵第二三四連隊第二大隊十屋誠一少佐）  
丁挺進隊（歩兵第二三五連隊第三大隊足立首少佐）  
と選定された。

司令部で決定した各挺進隊の任務は、あくまで新岩下鉄橋を目指す甲挺進隊を本命に、鉄橋確保後の付近一帯を占領し加勢する軍勢として、組織のチームワークを重視して同一連隊の第二大隊の丙挺進隊を選び、乙と丁の二挺進隊は南北の対敵陽動作戦を兼ねた一種の囮行動をも目的とした。

戦線となる南部粵漢鉄道の郴県から楽昌までの七〇キロ区間は、昭和八年に江西省の共産党紅軍討伐の軍事目的から蒋介石が再三にわたり突貫命令を発して、やっと工期二年五ヵ月、難工事の連続でわずか一二〇

キロの鉄道布設に、英人と仏人技師長が三度も交代し遂に完成したという、いわく付きの難関である。

南部粵漢線の鐵路延長は広東省源潭墟から湖南省来陽まで八七〇キロに及ぶが、焦点は新岩下鉄橋の所在する坪石鎮を中心とする僅か六五キロ余りの区間確保が挺進攻撃の奇襲目標と決定した。

昭和二十年一月三日、歩兵第二三四連隊長の戸田義直大佐は、異例の訓示をした。

「第一大隊は、甲挺進隊として……。行動中は、寝ると思うな、食べると思うな、道路を歩くと思うな……。二発の手榴弾は一発は戦闘用、一発は自決用である。元気で行け。眠さに勝ち、ひもじさに耐え、……。困難欠乏に打ち勝って、堂々と任務を達成せんことを祈る……。」（このことは出発前にも聞かされていた）

私はこのような重要な甲挺進隊員の一人として選ばれた（第一中隊第三小隊第三分隊員）。

私等は一月三日夜出発し、一晚中道のない所を歩き続けて、翌朝よく見ると元の出発点だったという笑い

話がある。そして、この作戦中一番恐ろしかったことは、第一中隊が本隊と分離して迷子になり二三日後にやっと救出されたことである。

とにかく第一中隊は大隊の最後尾を行進していた。二日目か三日目の夜行進中、前の方でパンパンと銃声がする。全員大地に伏せてその後の様子を見る。そのうち中隊の先頭がついウトウトと眠った。気が付く前は誰もいない。第一中隊置き去りである。本隊も明け方気が付いて捜してくれたが、連絡がとれぬ。翌日山中にこもっていた。不寝番が重機の脚を担いだのを発見して友軍と判った。やれやれ、本当に本隊と別れて迷子になると、心細い限り。何度自決用の手榴弾を握ろうとしたことか。

また別の日、小さい部落のある平坦地の小川を渡って徴発に行った際、敵の待ち伏せの側射に遭い、どうにもならず円匙で穴を掘って身を隠した。一晚中動けない。翌日本隊が道案内させていた現地人のついで第一中隊が敵に包囲されているとの情報で本隊が救出に来てくれて助かった。七人の戦死者が出た。その上負

傷者も出て、担送も出来ず、万事休して二人が手榴弾で自決した。可哀想でならない。

敵地であり、潜行隠密中だから何一つもしてやれないで別れて前進した。明日は我が身か？ 昼間は例によって敵の空軍が執拗に飛ぶ。夜のみ道のない山中や森の中を歩く、一寸先も見えぬ真つ暗闇。

それにしても新岩下鉄橋は長い鉄橋で線路の下はるかに川が流れていた。その橋のコンクリートのあちこちに穴をあけ、ダイナマイトをいっぱい詰り込んであった。もうスイッチを押すだけの準備完了であった。

約二週間余り人間じゃない生活を続けたが、ようもまああの様な不完全な地図というより略図と夜の星、磁石だけで二〇〇キロ先の目的地に達し、作戦を成功させたものよ、おれもよう生きていたものよ、夢ではないかと、我が身をつねってみたり、戦友と抱き合ったりの恐ろしい苦しい困難な作戦であった。鈴木大隊長以下のすばらしい能力、天佑としか言い様のない幸福あつてのことと思う。

第一大隊は前の桂林七星巖の決死攻撃に続いて、今度の打通作戦と二回も軍司令官より武勲赫々との感状を貰い、鈴木大隊長は師団司令部の高級副官として師団長の傍ら近くへ栄転して行った。

私の右肩脱臼は、後を引いて、三南作戦の折に手榴弾を投げた際、再び脱臼して弱った。戦後五十有余年の今でもちよつと具合が悪いので大事にしている。

支那戦線では我々のように戦闘部隊はいいが、後方の輜重隊や野戦病院は武器がないため、敵の待ち伏せにかかり大きい損害を出したり、また米空軍機の機銃で負傷された戦友がガス瘻疽で紫土色の肌になり、武運拙く散華していった数も両手で数え切れないくらいだ。

從軍中の嬉しかったこと二つほど。

第二三六連隊の兄が横井大隊（第二三六連隊の第三大隊）の騎馬伝令として乗馬して走り回っておるのに運よく会えて兄弟健在を喜んだこと。

また、同じ飯岡出身の河野さんが歩兵砲中隊へ補充で来て、馬の水のうを提げて歩くのに会ったこと。

「高橋のスーちゃんか。元気でよかったの。お父さん等皆元気で百姓しておるぞ」と国元の近況を知らせてくれた。

支那兵の着ている綿入れ防寒服のこと。

綿入れは銃剣に強い。簡単に思っただけでも角度が合わぬと貫けないで銃剣が曲がる。腰を落とし足をふんばり真直に突き入れぬと駄目。桂林の七星蔽陣地の壕の中に、日本兵と支那兵が互いに相手の胸を突き合っただけで死んでいたのを数例見た。日本人だけではない。支那軍にもアメリカ軍にもそれぞれの軍人魂が旺盛に漲っているのだ。

私は、桂林の七星蔽陣地攻略の時敵の擲弾銃よりの榴弾が不発で壕の中の竹槍の隙間へ転落し、九死に一生を得たが、桂林占領後、次の目標である柳州へ向け進撃中にも負傷した。日本軍の追撃が敵の予測以上

に速く、敵を追い越すこともしばしばであったが、夜行軍で強行軍の途中、川があり橋が落とされている。

橋の手前の街の中でまごまごしている時、二階から手榴弾を密集隊形の中へ投げ込まれた。数人負傷したが敵も数人殺した。その時私は右足の甲に小豆粒くらいの破片を受け、地下足袋を貫き負傷部位の圧迫を和らげた。

軍医さんは「手術するなら野戦病院へ後送の要あり。入院すると原隊復帰は難しい」と言う。理由は第四十師団は柳州を経て仏印まで行くらしく、今ここで原隊と別れると隊は遠く南方へ行ってしまふから原隊復帰は不能だとのこと。足の傷は治っても他の部隊へ入れられ顔も気心も分からぬ所は嫌と足の不自由さをかばいながら部隊と一緒に歩いた。そのうち、痛みも軽減して楽になって助かった。

現在でも言管銃創のままで残っている。五十年経た今日では痛みは殆どない。ただ困ることは飛行機での旅行で、空港での金属検査でいつも反応し警報音が出る。蔽軍にチェックされる。勿論凶器はない。検査員

は首をひねり、入れ歯のせいか？とパスしてくれる。内地の空港なら「昔、戦争で破片の盲管銃創がこの通りある」と靴と靴下を脱いで示すと納得してくれるが、外地の空港では特に中国ではそれもならず、困ってしまう。

南部粤漢打通作戦に甲挺進隊の一員として参加した私だが、約二週間の間は寝ず、道は歩かず、飯は食わず、反対のことはかりした。雪は降るし寒いし、食べ物とは米の炒ったもの。全く生きている条件はない。大隊長以下兵隊まで全員同じ困苦欠乏に耐えて戦った。あれは参加した者でないと、話で説明しても分からないだろう。

敵と戦わず、ただもう不戦と企図の秘匿に重点をおいての隠密行動挺進隊。よくも成功したものよ。でも私の知る範囲では負傷者四人の中、二人は痛ましくも手榴弾自決。同じ戦友同士で何もしてやれない。可哀なことであった。他の二人は大腿部や下肢の貫通で、「おれはどこまでもついて行く」「皆に迷惑はかけ

ん」と言って足を引きずりながら頑張りぬいた。この闘魂。他の作戦場と異なり、本作戦では常軌を逸した戦闘行動を要求された。詳しく述べると一冊の本になる。参加将兵の筆舌に尽くせぬ深くきつい労苦を推察してほしい。